

佐々木史郎著

『北から来た交易民—絹と毛皮とサントラン人—』

榎森 進

いわゆる「山丹交易」の研究は、戦前から行われてきたが、その研究が急速に発展してきたのは、ここ10数年来のことである。それには、幾つかの要因があるが、なかでも大きな要因として、(1)日本史研究の分野において、各時代ともに日本の歴史像をアジア史全体の中に位置づけて理解しようとする問題意識が近年とみに強くなり、こうした研究動向と連動しつつ、日本近世史研究の分野においても、近世の「鎖国」を、従来のように、対外関係の窓口を長崎一港に限定し、幕府が長崎における中国船やオランダ船（オランダ東インド会社の商船）との貿易を独占する体制であり、そのため、以来日本は、この「鎖国」によって、長崎を介した対外関係を除き、他の国々との関係を一切断ち切るに至った、という理解から、長崎のみならず、薩摩藩を介した琉球（琉球は清朝の冊封を受け、中国とも朝貢貿易をしている）、対馬藩を介した朝鮮（朝鮮は琉球と同じように清朝の冊封をうけ、中国と朝貢貿易をしている）、松前藩を介したアイヌ民族（サハリンのアイヌ民族は大陸の諸民族と交易をし、また、アムール川流域の諸民族は清朝に朝貢している）との政治・経済関係という「四つの口」を介した対外関係・対外交易の窓口を有していたのであり、しかも、こうした対外関係は日本型華夷秩序を軸として編成されていた、という新たな解釈がほぼ定説となりつつあることもあって、従来研究蓄積がそれ程多くなかった北の窓口である松前藩とアイヌ民族の関係、とりわけサハリンのアイヌ民族と大陸の諸民族との関係のあり方に対する関心が急速に高まってきたこと。(2)近年、中国で清朝の東北の諸民族支配にかんする史料集である遼寧省檔案館・遼寧社会科学院歴史研究所・瀋陽故宮博物院編『三姓副都統衙門満文檔案訳編』（遼瀋書社、1984年）が発刊されたこともあって、東洋史の分野に於いて、清朝の辺民制度に関する実証的研究が一段と進展したこと。(3)(1)～(2)の研究成果を積極的に活用しつつ、アムール川流

域に於けるフィールドワークを基にした当該地域の諸民族に関する民族学・文化人類学の研究が一段と進展したこと。さらに、(4)北海道開拓記念館が、この間中国・ロシアの研究機関・博物館等との学術交流を積極的に行い、その結果、日本・中国・ロシア・の研究者の交流が飛躍的に発展し、その研究成果を「中間報告」という形で相次いで活字にしてきたこともあって、(1)～(3)の研究成果を積極的に活用しながら、日本の各地で多くの「山丹交易品」が発見されるに至ったこと。等の諸点を挙げることができる。

本書（日本放送出版協会、1996年6月）は、文化人類学を専門とする著者が、これまでの著者の研究成果である「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」（『国立民族学博物館研究報告』14-3、1989年）、レニングラードの人類学民族学博物館所蔵の満州文書」（畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会、1991年）、「北海の交易—大陸の情勢と中世蝦夷の動向—」（『岩波講座・日本通史、10巻・中世4』岩波書店、1994年）等を基にしつつも、それにとどまることなく、上記の諸分野の研究成果を積極的に吸収しながら「サンタン交易」をめぐる諸問題について、日本史や中国史の「辺境史」の一つとしてではなく、「サンタン人」と呼ばれた「アムール川下流域や樺太に住んでいた人々を歴史舞台の主人公に据え」ながらも、同時に彼等「住民自身の視点と周辺国家からの視点の双方から複眼的に『サンタン交易』の実像」に迫ろうとしたものである。本書の主な内容構成を示すと次の通りである。

## 序章 絹と毛皮の交易

### 第1章 サンタン人とサンタン交易

### 第2章 サンタン交易前史—古代～17世紀

### 第3章 露清紛争とアムールの人々—悪魔と呼ばれたロシア人

### 第4章 清朝の統治体制と辺民社会—親密だった貢納民と官吏たち

### 第5章 江戸幕府の樺太政策と民族関係—幕府の公認を得たサンタン交易

### 第6章 絹と毛皮の商品価値

### 第7章 交易の終焉

私は、日本列島の北方史に大きな関心を持っているが、その関心のあり方は、日本史の研究者としての関心であるため、本書の内容について著者の意図するところを十分に理解したうえで評することはもとより不可能なので、私の関心に沿

って若干の感想らしきものを記すに留めざるをえないことを、予めお断りしておきたい。

本書を通読して感じたことは、著者が「序章」で記しているように、本書の大きな特徴は、「サントアン交易」の実像を、日本の北方史の一部や東北部の歴史の一部としてではなく、あくまでも「サントアン人」と呼ばれた人々の視点から迫ろうとしている点にあるように思う。従来の当該問題に関する研究の多くは、日本史側からの研究は言うまでもなく、東洋史側からの研究においても、両者共に、いわば著者がいうところの「辺境史」の一部として扱われてきた。そのためであろうか、従来の研究では「サントアン交易」の全体構造を、その交易を担った人々、特に「サントアン人」と呼ばれた人々の社会構造や、彼等の民族的特性を把握した上で理解することは、なかなか困難であったように思う。この問題との関わりで、私が特に大きな関心を持ったのは、次の諸点である。

先ず第1に、第1章で、18世紀以降のアムール川流域の諸民族は、既に中国から渡った陶器や漆器あるいは金属製の食器を使い、粟や米などの穀類を常食とするに至っていたにもかかわらず、19世紀以降彼等を調査したロシアの民族学者たちは、彼等の社会をいとも簡単に狩猟・漁撈・採取経済を基盤とした原始社会と規定した、と指摘していることである。この指摘は、我々がアイヌ社会の歴史的変容過程を分析する場合にも留意しなければならない重要な指摘であるように思う。

第2に、第5章で、かの有名な樺太アイヌの「サントアン人」との交易に於ける負債の問題について触れ、従来はその原因を、「サントアン人」が「奸智に富」んでいたのに対し、アイヌは「無知」・「蒙昧」であったことにあるごとく理解する傾向が強かったが、こうした解釈は、誤りであり、ことの本质は、当時サントアン人が他民族と交易する時には、商品の前渡し方式をとっていたところにあり、したがって、もしアイヌがその前渡し商品に対応するクロテンの皮を支払えなかった場合には、当然のことながら負債を背負い込むことになったこと、しかも、こうしたアイヌの負債を増大させた背景に、松前藩がサントアン人がアイヌにもたらすいわゆる「蝦夷錦」を半ば強制的にアイヌに求めたという事情が存在していた、と指摘していることである。

第3に、第6章で、サントアン人を初めとするアムール川下流域の諸民族が絹織物入手するために清朝に貢納したクロテンの価格と、日本側が樺太の自主で彼等

から絹織物を買取る価格（クロテン他の品物で支払う）間には3倍以上の開きがあり（日本の買い取り価格のほうが安い）、そのため、サンタン人達は、この価格の地域間格差を利用して多大な利益を上げていた、と指摘していることである。

以上の諸点は日本史を研究する立場から北方史に関心を持っている私自身の個人的関心に過ぎないが、しかし、このことは同時に、著者も指摘しているように、北方の先住民族は、日本・中国・ロシアという周辺の国家に様々な影響を受けながらも、彼等はそうした環境のなかで、まさに主体的な生活をしていたのであり、したがって、そこには、彼等自身の独自の世界が存在していたことを示す重要な問題でもあるように思う。本書は、まさにこうした北方先住民族の独自の世界をリアルに描いているところに大きな特徴があり、それだけに、読者に新鮮なインパクトを与えてくれる。

ただ、無いものねだりかもしれないが、著者は、「サンタン人」を「ウリチ民族」と規定することは間違いである、としながらも、他方で「今日のウリチにつながる人々、あるいはその大部分の人々の祖先」としているが、この説明は非常に分かりにくい。本書には、ギリヤーク（現、ニヴヒ）に対するアイヌ語呼称である「スメレンクル」やニクブン、オロッコ（現、ウイルタ）、ナーナイなどの民族名が頻繁にでてくるが、これらの民族がどのような民族なのか、という問題については殆ど説明がないので、こうした点についてもう少し突っ込んだ説明をしたうえで、「サンタン人」とはなにか、を説明してほしかった、というのが率直な感想である。しかし、本書は、近年とみに関心が高まっている「山丹交易」に関する内容豊かな文献であることは間違いない。